

たより

『美紗の会』  
ニュース  
第41号

## 美紗の会をふりかえつて

西松布咏

雨は何時も哀れなる中に  
はまして身にしむこと多かり  
聞く秋色に包まれた一葉の匂  
である。  
三昧線の音もとりわけ秋に  
は僕い世を愁うかのように心  
に染みるもの：  
殊のほか暑かつた夏の後は  
尚更に。  
その暑さの中で汗を流しな  
がらの稽古の成果を発表する  
第二十四回 美紗の会浴衣さらら  
いが九月八日六本木「花ごよ  
み」で開催された。  
いつもの如く、「白扇」で  
賑やかに始まり加藤さんのふ  
んわりと柔らかな司会で会主  
の母であるさんが「忍ぶ恋路」  
を。毎夜テーマを枕にも忍  
ばせての稽古が功を奏し、今  
はしつとりと唄い上げ。トッ  
パバッターの面目躍如。続い  
て玉のような赤ちゃんが生まれ  
れた川崎さんが伝田先輩の  
切々たる「有明」の糸を恐る  
恐るとう。  
返子の潮風で焼けた肌を浴  
衣に包みいかでそのまま声慣  
「四季の唄」を彈き唄いの青  
山さん。美紗の会の伽羅男三  
雲さんは浴衣姿もりりしく後  
輩の稽生さんの糸ではかなげ  
に「伽羅の香り」でまず声慣  
らし。唄と糸は微妙に入り組  
まるでジエントラ・スター  
によると手を青山さんが  
「ハードルが高すぎて：」と  
ぼやきながらの「降りてゆ  
く」をつぶり四つで受けと  
めてくれた川崎さんのたくま  
しさ。頼もしいと言えば、い  
の種。

いつも渋い声で鈴木さんの三味の音にしつかりと乗つて下さる竹澤さんのとめても帰る。今回は初めて上調子を受け持たされた大久保さんのソレで花柳章太郎のあたり役「お咲」の悪態を唄つた「佃の速快」など言つても絶妙のコントは飄々とした持ち味を競うべテラン同士の「奴さん」岡崎会長のマイペースの爽快な糸に乗つたかと思つうちょっととずつこける小高さんの中の娘はおかしくも息詰まるスリルはありました。

かくして一部の顔見世が過ぎる頃にはおなじみのお客さまもまじでつすりから打ち消され、冷たいビールでさしつさされつのお座敷の雰囲気が漂う中、いよいよ二部の本番へと。

落語の世界でも音のディレイアカペラで鍛えている美声の青山さんはアリアのような「淀の川瀬」を。

日先生は白衣を身を包んでの女医先生の广播生さん。さつぱりとした人柄とはうらはらの女性らしい情緒たっぷりの「萩桔梗」と「嘘とまこと」に周囲はうつとり。

経済学者の三雲さんはこのごとの株価の下落によって登り調子の山中さん。大吉の高音が出るかどうかに一喜一憂でしたがどうやらセレーフィーはつと一息。着物姿も身について唄も三味線も家事の合間に稽古で登り調子の山中さん。

「夕暮れ」で師匠を気持ちよく慰めさせ「縁かいな」と「夏の暑さ」の唄で日本情緒を

たつぶりと…でやんやの相手。このところ多忙の伝田さん。着物教室で超着物をマスターし、ますます特に鍔を磨く。「築地明石町」の美女に負けず、「この先に」での散歩も散らぬも主の胸へでは段分もしつかりアビレル。当日はお誕生日とあって会から駒頭下駄を贈られました。この春ネイティブ部に引っ越しした山根さん。三味線を師匠宅に預け遠距離稽古を心に決めテープと二度の上原が「六歌仙」に挑戦。さすが踊りの名手だけあつて間の良さに一目うつって多忙な仕事の合間にをつけてのチエフの予習でつかれていなせな唄も身につき相撲甚句の入の男をつって芸同士の恋の鞘当を唄つた「米八」がばれた照れくささを唄つた「牽牛花」では可憐な声で健在ぶりを。今回初めて「卯の花」の難曲を弾き唄いの千寿先生が上原が「六歌仙」に挑戦。さすが踊りの名手だけあつて間の良さに一目うつって多忙な仕事の合間にをつけてのチエフの予習でつかれていなせな唄も身につき相撲甚句の入の男をつって芸同士の恋の鞘当を唄つた「米八」がばれた照れくささを唄つた「牽牛花」を。日本の自然、文化、精神を取り戻して欲しいとボランティア活動で多忙な本郷さん。一人の男をつって芸同士の恋の鞘当を唄つた「米八」の代表曲が登場。虫の小高さんの方はすっかり貴婦の小高さんと美感の高辻さん。夏の暑さが感じなくなるほどの熱演ぶりにお座敷はタダタダしんと聞き入りました。よく本格的なベランが続々登場! 向日葵のようなる金木さん。東の間の忍ふ瀬を雷さん。東の間の忍ふ瀬を雷さん。東の間の忍ふ瀬を雷さん。東の間の忍ふ瀬を雷さん。

と「対浴衣」を。」  
酒をおつり絶つて周年  
を迎へ会から表彰された小高  
さん。  
おはこの「蘭蝶」を卒業し  
今回は愛のこの「蘭蝶」の恋心を切々  
きりの高音は今絶好調!はじ  
と明った「仇名草」そのとび  
のキヤリアの佐久間さん。  
吉原の遊女満々橋にしどこ  
娘は余裕の粋な節回しで隅  
田川の夏の風情を描いた「夏  
の涼み」をしみじみと。  
美紗の歌のトリーは二十四年  
の歴史を大久保さん。  
娘の次郎の遊女満々橋の前で辱  
められ可愛さあまつて怨みに  
転じ切り殺してしまう「龍つ  
るべ」を岡崎会長の替手にそし  
て江戸小唄の軽味を要求され  
たが「住家」を唄い分け貢  
禄充分!我の「住家」を唄ふ  
古典を大事に唄い続ける竹  
澤さん。近松門左衛門の「心  
中万年草」唄つた「一声は」  
娘の悲恋を唄つた「と立を」  
と立を恋の道具に見立てた  
「夕立」おなじみ三絃師菊音さんは  
花井お梅のもつれた人生を  
唄つた「青柳の糸」暗音雁  
の中にある「空はの」暗音雁  
常整津や富本で鍛えたのどで  
常整津や富本で鍛えたのどで  
たつぶりと。  
いよいよ最後の演目は会主  
の糸由千寿、文師の小唄ぶり  
「河水」  
うな黄緑の終わりを惜しむかのよ  
をあしらった墨色の帯の芸者  
姿で船頭との粋な逢引の様子  
上品に振り付けなり、「さく  
さく清方描く一幅の戸口」  
緒を披露して下さいました。  
過ぎてしまったシーンを思  
いものである。  
でも稽古を続けてゆくこと  
は又新たなる旅にでること。  
今度はどうんな苦しみや喜び、  
感動に出会えるだらうか?。  
そんな期待の中で個性あふ  
れる会員が美紗の会を応  
けられる幸せを感じみじみ感じ  
る秋日和でございます。

平成十四年十月二十日

発行者  
「美紗の会」  
☎03-3441-2726  
編集責任者  
大久保朋子

れて雲間」そして歌沢「海晏寺」をしみじみと。三昧線は集中した後なので唄は静滯抜けになつてしまつた。歌は照沼さん。かえつて力が抜けて一葉描く「にごりえ」の哀しみが出ていたようなどり余る美声を唄つと抑えて心の一本さを唄つて応援で駆けつけた友人をうつとりさ

待つ風ばかり残るらん  
照 沼 太佳子

品と聞いてまた驚く。「いわねー！」と横で母がため息。この日、師匠が選ばれた曲は、「夕暮れ(柴胡根)」秋の夜(歌詠)「萩草(瑞樹根)」「蘭蝶(仇名草)」「浮世説(豊後節)」、そして「松風(富木町)」である。「秋」として「待つ」という糸で紡いだ選曲だ。いつも感

「三味線で聞くいくつもの人生」の記

り合わせになるのが四季の国、日本のは中央通りを見下ろす優雅な一室。レースのカーテン越しに見える六階の銀座の夕暮れ。調絃を終えてサラリソングの夕暮れ。かと彈きをしている布咏師匠。原稿に目を通しながら大事な言葉をさえられては美しく、周到に進んでいたのであります。

ところがその時…

パン！と何やら小さな世界がはじけるような音。三昧線の皮が破れたのです。

時まさに開演の四十分前。「アラ、今までこんなことがつたもので、」と師匠困惑。優子生徒たちを丸くしてアタフタ。資生堂の皆さんも一種種々に打開時間を探査して下さる。かくも長き時間があったらうかとその時の準備をして。いた私にお呼びの声が掛かった。

「今から白金台まで取りに行くつてくれて、また手持つてもらわなければいかわからぬと思つたら、とりあえず左から二丁、よろしくね！」

ハイと一声あって、銀座線、南北線を乗り継いでお稽古場へ。一応懶んでみたけれど日頃の勉強で錠等したけられました。ならば、師匠の仰せの通り左から二丁、三田線、浅草線を抱えて南北線へ。生堂に到着したのが午後七時半。三昧線は舞台上で組み立ておら師匠は舞台上で組み立てかかる。前代未聞、公開面前本

月二十一日の秋風が吹いた八  
東京銀座八丁目、旧資生堂本  
パラーレ本店跡地に開設された  
ビル八階にあるワード資生堂  
本堂で、素敵な催し物が開催され  
ました。  
法政大学教授お馴染み田中  
優子先生のコレディーション  
と司会進行で毎月おこなわれて  
いる「資生堂サクセスフルエイ  
ジング講座」の対談シリーズの  
うちの一回で、ゲストは西松布  
咏師匠。お題は「三昧線  
で聞くいくつもの人生」。  
「すごいタイトルね。どうし  
ましょ」と師匠は樂屋でちよつと  
テレビしてから、「こうとしか書きようがない  
んですよ、今回は」と優子先生  
◆ ◆ ◆  
当のお二方のお召し物は、  
師匠は薄い端始、優子先生は月

川崎 隆章

感じてはなく」と読み換える。が  
素朴で大らかな古曲の世界。底流に  
流れれる蜜濃密さ、輪郭  
のあるメロディラインとして現  
れているのが特徴。  
次は辰巳「芸者」の心意気をう  
たつ小唄「辰巳よいとこ」。  
そもそも吉原の遊女といふものは、「太夫」<sup>クラス</sup>になると  
娘・踊りだけでなくお茶・お  
花・将棋・囲碁など、俳句・ならな  
和歌・全部しなければならない  
かつたのでしたが、やがて、歴  
史とともに遊歩が洗練され、技  
巧が高まつて専門化してくる。  
従つて、芸をひらく専門の男芸  
者(将から芸者)と女芸者が分化した  
この時から芸者は売れるが本題。  
は売らないという立場をとるよ  
うになつたのです。  
そんな中「辰巳芸者」と呼ば  
れる誇り高き芸衆は、女だてに  
お座敷で羽織の着用を許され  
ていた。今でいえば男装、それ  
も第一礼装のタキシード着用を  
許されていた。羽織の着用は男仕  
業(江戸時代は最も足りぬもの)  
だけにしか許されていなかつ  
た。  
ところがそれでは女芸人とし  
て、のけじめがつかないというの  
で、足りぬだけは真冬でも裸足を通  
くるぶしから先はいつもも軽なん  
ツルツルに磨き上げていたんだ  
そうです。意地でわきまえが纏  
りなす独特の風俗。

◆番中の組「絶対演」に優子先生は「皆さんの、ご覧になつたことはない方も多いんじゃないか? と思ううん組み立てるんでよ」とやつて組み立てるんでよオ。さすがです。

◆師匠は「組み立てながら、三味線の構えとか扱いの方について解説を加えさせてださる。なんとも贅沢な講座ですね。◆

◆この日は、師匠が幼少から手がけた年代の曲順を追つた曲順で構成されました。まずは六歳の時に習つたためりやす「琴賀節」の「明けの鐘」で、こ機嫌伺い。

◆「明けの鐘」は平明で、子供が習うにはほんとこないもの。なぜ歌詞は遊女の一切ない心情を唄つたもの。「唄の意味もわからず唄つてたんでし」と師匠は「うやうけれど、優子先生は「でも、そこからはず一つ

唄も連続と情緒を醸しづながゆつたりと唄うようになつていいますが、三味線と唄とは切れ味のさや、それだけに棒を着たように棒で唄うのが小唄の色あいでした。うつあしたうたが世本彦太郎という粹な旗本なんですが、それだけに氣取つて、節を大事にした、ゆつたりとしたものが多かったですねえ「曲は哥沢の夜」。

そして、いよいよ地唄。本当にうなりながら曲用意されたいたいより演奏開始が遅れてしまつたので、泣く泣く数曲トバさざるを得なかつたようです。

「富本を経て、最終的に地唄をやうろうと思ったのは、どういきつけたんだんですか」という問い合わせて、師匠は静かに語りはじめました。

地唄の名手、閑嶺ひで女師に「あなたの声は地唄にあつていいのではないか」と見出された話、隼門の國立劇場で上方舞の地を任されたその時、樂屋で聴いていた孤高の名手、西松前文一師事が「鎧甲に身を固めているがどうだ? 前が鎧甲で身を固めているがどうだ? あれは唄を私は強するのを教えるんだよ」といって表記が使い分けられました。師匠によれば「今でこそ、小唄のようにうたが歌い手」といって「歌沢」または「哥沢」といって表記が使い分けられました。

立つ。何より「一番優んでいるのが仕掛け人」の優子先生。わざわざそんな三昧線を取り上げて、なぜか布咏師匠も、長唄用の三昧線で聴かせられるだけなのに。彼のことを演奏されてしまう。そこで、対談の間にモテアピツツと小さな音を立てながらはじけが胴の中にある。あと五分もすれば、どうが渡つたって危険な橋。出てくる音はまたも起きるしないで、さうして、お聴きください」と。『では、お聴きください』といひまつたのは地獄「恩病」。出てきた音を聴いて驚いた。それはまさに、三昧線の歴史を往き還りするような音でした。時に直接の祖である琵琶のような音、また時には出会うシルクロードの向こう側の兄弟たちの音、あるいはジョン・ケージのブリペアードピアノの音、釣り竿が震え、雨水がトイト音。今世界に古今東西三千大世界へと拡散せんとする三昧線を、布咏師匠がなんだめには三昧線の音へと引き戻す、またなぐさざめては古今の世界へと遊ばせる役目を終えようとする最後の皮から、その場限り、一度限りのドラマを掘り起こす、うそとされかな孤独の光が見えました。

尽くしたが、その翌々年のように絶境地を陥れ、  
を残して世を去りました。  
年代展の面白さは、一つ一つ  
の作品の味もさることながら、一つ一つ  
こうした強烈なドラマに触れられる  
という点にあります。この  
晩、田中俊一先生が企画された  
催しものも、まさに「三味線と  
獨りの人生」というドรามを描  
く場所であったことは、言うまでも  
ありません。生涯という作品  
を見せる。それが年代展の本領  
なのだと思います。◆◆◆

どこかで。お楽しみ。それではまた、

今	後	の	催	し
---	---	---	---	---

- 十一月二日（土） 松山城内中庭 五時一八時 「江戸の粹」トーキーを交え て弾き語り
- 十一月三日（日） 鎌倉屋越学習セントラル 二時一四時半 邦楽鑑賞会・三昧線音楽を 楽しむ
- 美紗の会 本郷公基氏の司 会で、ジョン・ソルト氏と 共に 中野一月九日（土） 中野シルククラブ 二時一四時 「秋を着る」粹な唄と嘶あ れこれ ジヨン・ソルト氏のユニー クな語りを交えて
- 十一月十六日（土） 徳島市武家屋敷原田邸 六時一八時 「江戸の魅力」唄と三昧線 とお話 江戸の恋と粹を唄とジョン・ソルト氏の洒落たエス プリ
- 十一月十七日（日） 高松市カフェエロザ 秋風に江戸の香をのせて唄 とおしゃべり

咲き誇つた夏、富潤の終る荒涼の一暮  
は閉じられたのでした。  
岡本太郎はかつて「孤独」とい  
うことは、絶対に社会的だ」と  
語りました。  
孤独は隣りばつちではない。  
むしろ、隣りは深い何かわり  
や、尊敬の念から産まれる「豊  
潤なる関係の産物」に他ならな  
いのです。  
糸と皮と胴がバラバラになる  
寸前で開み力を尽くし、糸は糸駒  
は駒の本分を失くし、皮は皮駒  
最期のお勤めを果たして満場の  
人心をつか出したのでした。  
どこかに出かけるといううこと  
で、必ずこういうドラマに出会  
える、というのではなく、こういう得  
難い場面に遭遇する確率が高く  
なります。  
どうぞ、これをお読  
みの皆様、出かけぞ、会出づ  
交わつてみませんか。交わるぶ